

# 『大宝積経』における死生観の研究

－チベット語訳〈優波離所問経〉和訳研究(1)－

中御門 敬 教

## はじめに

仏教の死生観<sup>(1)</sup>を扱う際に大いに参照すべきものとして、大乘経典の大叢書『大宝積経』がある。そこには本稿で扱う、大乘戒経<sup>(2)</sup>の代表ともいえる〈優波離所問経〉<sup>(3)</sup>が所収されている。戒律を扱う当経の性格は、経名 *Skt. Vinayaviniścayaupālipariṣcchā* に出る「Upāli (持律第一)」がよく象徴している。「戒律」とは仏教徒の生活と関係するものであるが、その意味においては〈優波離所問経〉は「死生観」の中の「生」に力点がおかれた経典である。また経名との関係でその性格を補説すると、経名冒頭に出る「vinaya」は、いわゆる大乘の三蔵における「vinaya」である。その場合は「経律論」の「vinaya (律)」ではなく、分別に基づく煩惱を根本的に「調伏」する意味での「vinaya」である<sup>(4)</sup>。古来、釈尊の教化に見られたような、原義の「調伏」義に立ち返った上での再定義のやり方である。当経の場合は、特に「三十五仏悔過」に代表される罪過滅尽を主題とし、小乗律での形式主義を解消した、真の「vinaya」の確定を含意している。そうした点における両者の「決択 (viniścaya)」であり、両者の総合を意図した大乘経典といえよう<sup>(5)</sup>。

当経における先行研究としては、現時点では Pierre PYTHON [1973] *Vinaya-Viniścaya-Upāli-Pariṣcchā*, Paris が最も詳細である。その一冊の中には、チベット語訳のテキスト校訂、残存するサンスクリット語原典からのローマナイズと影印紹介(全体の約四割前後)、漢訳諸本の影印紹介(『大正蔵』)、フランス語訳、詳細な註訳(漢訳諸本を対照<sup>(6)</sup>)、語彙索引、引用状況<sup>(7)</sup>を含む解題・註記、マートリチュータによる〈三十五善逝讚〉のテキスト校訂とそのフランス語翻訳

など、理想的な文献研究がなされている。大乘仏教の研究において極めて重要な当経であるが、さほど重点的な研究論文が確認されない理由の一つに、この完成された Python [1973] の存在がある点はほぼ間違いない。いわゆる「草の根の生えない（研究の余地のない）」ほどの文献研究である。

そうした状況の中で我々がチベット語訳〈優波離所問経〉に注目し、再び翻訳を開始するには理由がある。Python [1973] 以降に新たな研究が公表され、それとの照合が求められているのである。その第一は 1980 年から 1990 年にかけて進展した白崎顕成氏によるジターリ研究の成果である<sup>(8)</sup>。同氏は〈優波離所問経〉から三十五仏悔過を説く段を抜粋した〈菩薩墮罪懺悔経〉あるいは〈菩提墮罪懺悔経〉と呼ばれる抜粋経典にいち早く注目し、そのジターリ釈の詳細な翻訳研究を公表した。これが端緒となって、インド大乘菩薩戒（アサンガ流、シャーティデーヴァ流）の一連の研究を促進させたといえよう。

そしてその第二は、藤仲孝司氏と筆者の共同研究による成果である<sup>(9)</sup>。近年、チベット仏教ゲルク派に所属する著名な学僧イエシェー・ギェルツェンによる〈菩薩墮罪懺悔経〉に対する翻訳と分析の研究を行った。この注釈には、インド仏教の代表的な悔過儀礼「四力懺悔」が言及されており、小乗律の布薩儀礼との対比の面においても極めて興味深いものである。

Python [1973] から四十四年経過した現時点において、〈優波離所問経〉の中核を為す〈菩薩墮罪懺悔経〉に対する、インド・チベットの主要な注釈研究が出揃った。これらの成果を踏まえた「和訳研究」には、何らかの意義があると考えた次第である。特に小乗律から大乘戒への展開、ないし大乘仏教の興起問題を考える上でも、平川彰氏などの声聞乗の律研究という業績との関係で、新しい課題が設定できるかもしれない。

## 凡例

- ・テキストとして、Python [1973] を利用して和訳研究を行う。
- ・Python [1973] が示す「通し番号」に基づき、部分ごとに和訳を行う。その際に私に小見出しを付け、理解の便宜を図る。
- ・唐菩提流志訳『大宝積経』「優波離会第二十四」（『大正蔵』11、宝積部、

No.310-24) と、西晋焮煌三蔵(竺法護)訳『仏説決定毘尼経』(『大正蔵』12, 宝積部, No.325) を主に参照した。

・今回扱う範囲は、チベット大蔵経の範囲では (P.Zi.111a-117a) (D.Ca.115a-120b) である。

### 〈聖なる律の決択であるウパーリによる所問〉と名付けられた大乘經典

(P.Zi.111a3) (D.Ca.115a1) インドの言葉で、『*Ārya-Vinaya-viniścaya-upāli-paripṛcchā*』と名付けられた大乘經典。チベットの言葉で、『*'Phags pa 'Dul ba rnam par gtan la dbab pa nye bar 'khor gyis zhus pa*』<sup>(10)</sup>と名付けられた大乘經典。

第一函。あらゆる仏と菩薩とに敬礼する。

#### 1. 序分

このように私が聞いたある時に、世尊はシュラーヴァステイ(舍衛城)におけるジェータ〔王子〕の林のアナータピンダグ園に、比丘五百人ほどの大きな比丘の僧伽(僧の集団)と、ちょうど千人の菩薩と共におられた。

#### 2. 衆生を成熟するための方便、手段、思いによる守護 一世尊の問い

それから世尊は、彼ら菩薩摩訶薩たちを大象 (glang po che) の観察の仕方です〔身をひるがえして〕<sup>(11)</sup> ご覧になり、仰せになった-

「良家の子らよ、あなたたちは未来の時期、未来の時に<sup>(12)</sup> 妙法を摂受した (yongs su bzung ba) ために、如来が十萬コーティ・ナユタの無数の劫において正しく成就した (yang dag par bsgrubs pa) この無上正等覚を正しく摂受し、衆生たちを成熟する (yongs su smin pa) ために、種々の方便と手段<sup>(13)</sup> と思いとによって守護することを (Tib.yongs su bskyang par, Skt.\*paripālana)、誰が喜びますか (su spro)。」と。

#### 3. マイトレーヤによる返答 一正覚を摂受する志の表明

それから、菩薩・摩訶薩〔である〕マイトレーヤ (Byams pa) が座から立った。

上衣を一方の肩にかけてから、右膝の膝頭を地に (P.Zi.111b) つけた。世尊の〔居られる〕その場所の傍らで合掌して、拜んで、世尊に対してこのように申し上げた－

「世尊よ、私は後の時期、後の時に、妙法を摂受するために、如来が十万コーティ・ナユタの無数の劫において正しく成就したこの無上正等覚を、正しく摂受することを喜んでいます。」

#### 4. 諸菩薩による返答 (1) ー正覚を摂受する志の表明

菩薩である獅子 (Seng ge) が申し上げる－

「世尊よ、(D.Ca.115b) 私は、種々の方便と手段と思いによって、衆生たちを守護することを喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕金剛手が申し上げる－

「世尊よ、私は、衆生たちを悪趣に居ることから完全に解脱させることを、喜んでいます。」と。

文殊童子 (‘Jam dpal gzhon nur<sup>(15)</sup>gyur pa) が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちの、人 (gang zag プドガラ) の思いを完成させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕智幢 (Ye shes tog<sup>(16)</sup>) が申し上げる－

「世尊よ、私は無知 (ma ’tshal ba)<sup>(17)</sup>の衆生たちを成熟させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕法幢 (chos kyi tog) が申し上げる－

「世尊よ、私は法施によって、衆生たちを成熟させることを、喜んでいます。」と。

#### 5. 諸菩薩による返答 (2) ー正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕月幢 (zla kyi tog) が申し上げる－

「世尊よ、私は諸功德によって衆生たちを成熟させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕日幢 (Nyi ma kyi tog) が申し上げる－

「世尊よ、私は安楽乗 (theg pa bde ba) によって、衆生たちを成熟させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕無畏 (Bag tsha ba med pa)<sup>(18)</sup>が申し上げる－

「世尊よ、私は無辺の衆生界を成熟させることと、摂受することを (P.Zi.112a) 堪忍します。」と。

菩薩〔である〕賢護 (bZang skyong)<sup>(19)</sup>が申し上げる－

「世尊よ、私は「名は果がある<sup>(20)</sup>」と述べることにより、衆生たちを成熟させることを、喜んでいきます。」と。

菩薩〔である〕無尽慧 (Tib.Blo gros mi zad pa, Skt. Akṣayamati) が申し上げる－

「世尊よ、私は広大な誓願 (smon lam rgya chen po) によって衆生界によって知ることができない〔それほど多くの〕者たちを<sup>(21)</sup>解脱させることを、喜んでいきます。」と。

## 6. 諸菩薩による返答 (3) ー正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕月光童子 (Zla 'od gzhon nur gyur pa) が申し上げる－

「世尊よ、私は安楽な資具すべてによって衆生たちを (D.Ca.116a)〔満足に〕安住させることを<sup>(22)</sup>、喜んでいきます。」と。

菩薩〔である〕賢眼 (Mig bzang) が申し上げる－

「世尊よ、私は〔諸衆生に、〕衆生たちの<sup>(23)</sup>安楽と安心 (yid bde ba) の根本を確立することを (Tib.nye bar sgrub par, Skt.\*upasamhāra)、喜んでいきます。」と。

菩薩〔である〕観自在 (sPyan ras gzigs dbang phyug) が申し上げる－

「世尊よ、私は悪趣と悪途から衆生たちを救護することを<sup>(24)</sup>、喜んでいきます。」と。

菩薩である大勢至 (mThu chen thob) が申し上げる－

「世尊よ、私は諸悪趣から救済されていない<sup>(25)</sup>衆生たちを渡すことを、喜んでいきます。」と<sup>(26)</sup>。

菩薩である善具 (Tshogs can)<sup>(27)</sup>が申し上げる－

「世尊よ、私は調伏されていない (ma dul ba)<sup>(28)</sup>衆生たちを調伏する路 (shul)<sup>(29)</sup>を顕示することを (Tib.nye bar ston par, Skt.upadarśana)、喜んでいきます。」と。

#### 7. 諸菩薩による返答(4) ー正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕妙意 (Yid bzangs<sup>(30)</sup>) が申し上げるー

「世尊よ、私は信解の劣った衆生たち<sup>(31)</sup>を成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕善順 (Des pa) が申し上げるー

「世尊よ、私は慧 (shes rab) の劣った衆生たちを成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕威光蘊 (gZi brjid phung po) が申し上げるー

「(P.Zi.112b) 世尊よ、私は畜生の胎 (Tib.sknye gnas, Skt.\*yoni) に生まれた者たちを成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕無煩通達 (Nyon mongs pa med pa rtogs par khong du chud pa) が申し上げた。

「世尊よ、私は路を正しく教示することによって、衆生たちを成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕喜見 (mThong dga) が申し上げるー

「世尊よ、私は衆生たちに、無量の安楽な資具を与えることを (Tib.nye bar bsgrub par, Skt.\*upasamhāra)、喜んでいます。」と。

#### 8. 諸菩薩による返答(5) ー正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕善根 (dBang po bzang) が申し上げるー

「世尊よ、私は苦を憶念したこと (dran par bgyis pa) によって、衆生たちを成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕入不可思議解脱 (rNam par thar ba bsam gyis mi khyab pa la yang dag par zhugs pa) が申し上げるー

「世尊よ、私は (D.Ca.116b) 思いほどによって、餓鬼 (yi dags<sup>(32)</sup>) の世界に生まれた衆生たちを、解脱させることを喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕日光 (gNyi<sup>(33)</sup> 'od) が申し上げるー

「世尊よ、私は未成熟な衆生たちを成熟させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕無垢称 (Dri ma med par grags pa) が申し上げるー

「世尊よ、私は衆生たちの思いすべてを円満に完成させることを、喜んでいます。」

と。

菩薩〔である〕威光力 (gZi brjid stobs) が申し上げる -

「世尊よ、私は衆生たちの悪趣の路が無くなることを、喜んでいます。」と。

### 9. 諸菩薩による返答 (6) - 正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕離疑 (Yid gnyis spong) が申し上げる -

「世尊よ、私は劣った衆生たちを渡す (済度する) ことを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕無畏住 (Bag tsha ba med par gnas pa) が申し上げる -

「世尊よ、私は衆生たちを摂取するために、「善いかな。」という〔言葉〕を (P.Zi.113a) お授けになることを、喜んでいます<sup>(34)</sup>。」と。

菩薩〔である〕慧吉祥 (Ye shes dpal) が申し上げる -

「世尊よ、私は種々の信解を具えた衆生たちを、信解のとおりに成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕無住 (gNas pa dpag med) が申し上げる -

「世尊よ、私は衆生たちに無為の路 ('dus ma bgyis kyi shul) を顕示すること (Tib.nye bar ston pa,Skt.\*upadarśana) を、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕住一切法無畏 (Chos thams cad la bag tsha ba med par gnas pa) が申し上げる -

「世尊よ、私は種々の信解を具えた衆生たちに対して、信解のとおりに正しく教示することを、喜んでいます。」と。

### 10. 諸菩薩による返答 (7) - 正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕宝吉祥 (Rin cen dpal) が申し上げる -

「世尊よ、私は衆生たちに宝の蘊 (rin po che'i phung po) を示現 (Tib.kun tu ston pa,Skt.\*ādarśana) することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕賢慧 (Blo gros bzang po) が申し上げる -

「世尊よ、私は好ましい色を示することにより、衆生たちを成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕無垢威光 ('Dri med gzi brjid) が申し上げる -

「(D.Ca.117a) 世尊よ、私は親しみ (gcugs pa) をもって、衆生たちを正しく摂受し、成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕賢宝 (Nor bu bzang) が申し上げる－

「世尊よ、私は〔衆生たちに〕以前の生を随念させること<sup>(35)</sup>によって (rjes su dran par bgyid pas)、衆生たちを成熟することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕福光 (bSod nams 'od zer) が申し上げる－

「世尊よ、私は正願 (Tib.yang dag pa'i smon lam, Skt.\*samyakpraṇidhāna)<sup>(36)</sup>によって、衆生たちを導くことを、喜んでいます。」と。

## 11. 諸菩薩による返答 (8) －正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕吉祥賢 (dPal bzang po) が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちを諸々の苦から永久に解脱 (P.Zi.113b) させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕宝手 (Lag na rin po che) が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちを諸々の宝によって安楽にすることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕智恵 (Blo gros) が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生〔すなわち〕困窮した者たちの困窮を無くすことを喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕除一切障 (sGribs pa thams cad rnam par sel pa)<sup>(37)</sup>が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちをすべての煩惱から解脱させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕金剛光 (rDo rje'i 'od) が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちに賢れた路 (shul bzang po) を顕示することを、喜んでいます。」と。

## 12. 諸菩薩による返答 (9) －正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕現徳像 (Yon tan gzugs ston) が申し上げる－

「世尊よ、私はすべての思いを極歡喜させることによって (rab tu dga' bar bgyid pas)、衆生たちを解脱させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕法出曜 (Chos mngon par 'phags)<sup>(38)</sup>が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちに浄らかな法眼 (chos kyi mig rnam par sbyang ba)<sup>(39)</sup>を教示することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕金剛藏 (rDo rje'i snying po)が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちを、諸々の障礙から解脱させる (D.Ca.117b) ことを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕法現 (Chos 'byung)が申し上げる－

「世尊よ、私は法によって衆生たちを諸々の障礙から解脱させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕無少有 (Ci yang min)<sup>(40)</sup>が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちの煩惱の毒すべてを除去することを、喜んでいます。」と。

### 13. 諸菩薩による返答 (10) ー正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕(P.Zi.114a) 月上 (Zla mchog)が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちに法の分 (chos kyi phyogs)<sup>(41)</sup>をよく教示することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕獅子慧 (Seng ge'i blo gros)が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちに法施を授けることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕童光 (gZhon 'od)が申し上げる－

「世尊よ、私は衆生たちを、劣った住処から解脱させることを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕仏吉祥 (Sangs rgyas dpal)が申し上げる－

「世尊よ、私は賢れた路を教示することによって、衆生たちの悪趣の路を遮断することを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕金光 (gSer 'od)が申し上げる－

「世尊よ、私は身を教示することによって、衆生たちを成熟することを、喜んでいます。」と。

#### 14. 諸菩薩による返答 (11) – 正覚を摂受する志の表明

菩薩〔である〕徳吉祥 (bSod nams dpal) が申し上げる –

「世尊よ、私は、衆生の利益を行う者たちの利益を行うことを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕持世 ('Gro ba 'dzin) が申し上げる –

「世尊よ、私は衆生たちの有情地獄の門を閉じることを<sup>(42)</sup>、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕執甘露 (bDud rtsi 'chang) が申し上げる –

「世尊よ、私は衆生たちを輪廻から渡すことを、喜んでいます。」と。

菩薩〔である〕網光童子 ('Dra ba can gyi 'od gzhon nur gyur pa) が申し上げる –

「世尊よ、私は後の時期、後の時に、光を示現することによって、衆生たちの煩惱をよく寂める<sup>(43)</sup>ことを、喜んでいます。」と。

#### 15. 驚異であり、希有である被鎧精進への発趣

それから具寿シャーリプトラは<sup>(44)</sup>、(D.Ca.118b) 彼ら菩薩が衆生を成熟する〔被〕鎧〔精進〕への発趣 (go cha la 'jug pa)<sup>(45)</sup> (P.Zi.114b) 〔について〕の、そのようなこの教示を聞いて、驚異 (ngo mtshar) と希有 (rmaḍ du byung ba) 〔の思い〕を持つことになった<sup>(46)</sup>。世尊に対してこのように申し上げた –

「世尊よ、ああ、どれほどにこれら菩薩・摩訶薩の、大悲と方便への善巧とは不可思議であり堅固な精進の大鎧を被っているのかと、どれほどかすべての衆生によって制御し難く、推測<sup>(47)</sup>し難く、親近し難く、数え難く、制伏されない威光を具えていることは、驚異です。世尊よ、さらにまたこのように、威光が制伏されない〔ところの〕菩薩・摩訶薩たちのもとで、頭と手と足と目を乞う者たちがいて、すべての物を乞うとしても、菩薩・摩訶薩たちは萎縮せず、怠惰にならず<sup>(48)</sup>、大いに喜んでいることを、私は驚異〔だという思い〕を持っています。世尊よ、さらにまた、私は<sup>(49)</sup>このように考えています。誰か衆生たちが、菩薩・摩訶薩たちに加害し、内と外の諸々の物を乞う〔ところの〕彼らすべてが、不可思議解脱に住する菩薩・摩訶薩のみになると考えています。」と。

## 16. 菩薩・摩訶薩の三昧と、方便と、智慧と、智慧の領域

〔シャーリプトラが〕 そのように申し上げると、世尊は具寿シャーリプトラに對してこのように仰せになった。

「シャーリプトラよ、それはそのとおりである。それはそのとおりである。菩薩・摩訶薩の三昧と、方便と、智慧と、智慧の對境<sup>(50)</sup>はそのようである。シャーリプトラよ、菩薩・摩訶薩のその對境は、すべての声聞と獨覺によつて〔理解されるもの〕ではない。シャーリプトラよ、それについて (P.Zi.115a) (D.Ca.118a) 菩薩・摩訶薩たちが、衆生の思を圓滿に完成すべきために、私の神變 (rnam par 'phrul ba) すべてを示現しても、菩薩の法性から動じない (byang chub sems dpā'i chos nyid las mi gyo'o)<sup>(51)</sup>。」と。

## 17. 菩薩・摩訶薩による相手に応じた姿の顯現 (1)<sup>(52)</sup>

「シャーリプトラよ、それについて菩薩・摩訶薩たちは、衆生〔のうち〕の居士である<sup>(53)</sup> 驕り (Tib.rgyags pa, Skt.\*mada) によつて酪酊した者 (Tib.myos pa, Skt.\*unmāda) たち<sup>(54)</sup> 對して、富貴による驕りを取り除く<sup>(55)</sup> ために、居士の姿を示現する。

衆生〔のうち〕喜びによつて驕り、酪酊した者たち對して、喜びの驕りを取り除くために、大力士の力 (Tib.tshan po che chen po'i stobs, Skt.\*mahānagna-bala) と、那羅延天の喜びの力 (Tib.sred med kyi bu'i spro ba'i stobs)<sup>(56)</sup> を示現する。

衆生〔のうち〕涅槃を希求する者たち對して、種々の涅槃の道を近くに現しました。

声聞乘を希求する衆生たち對して、声聞乘によつて般涅槃するために、声聞の姿を示現する。

獨覺乘を希求する衆生たち對して、緣起に悟入するために、獨覺の姿を示現する。

菩提を希求する衆生たち對して、すべての仏法を正しく得るために、私の姿を示現する<sup>(57)</sup>。

シャーリプトラよ、そのようならば菩薩・摩訶薩たちは、種々の方便によつて衆生界を成熟させてから、諸々の仏法に安住させる。」と。

## 18. 如来の定義

「それはなぜかといえば、シャーリプトラよ、如来の智慧〔である〕究竟涅槃 (Tib. shin tu mnya ngan las 'das pa, Skt. \*atyantanirvāṇa) の解脱を除いて、衆生たちの (P. Zi. 115b) 他の解脱は無い。それゆえに「如来 (de bzhin gshegs pa)」というから。

それはなぜかといえば、「如来」は、この真如 (de bzhin nyid)、如実 (ji lta ba bzhin) を了解なさる<sup>(58)</sup>。それゆえに「如来」という。

そして種々の仮設 (gdags pa) によって衆生 (D. Ca. 119a) たちに了別させる、それゆえに「如来」という。

そしてすべての善法を具え、すべての不善法を断じたことによって、それゆえ「如来」という。

そして〔業果に〕縛られた衆生たちに対して、解脱を示されるので、それゆえ「如来」という。

そして悪道に居る衆生たちに対して、善い道を示されるので、それゆえに「如来」という。

そして空性についてお説きになり、空性より出現するので、それゆえに「如来」というから。」と。

## 19. 菩薩・摩訶薩による相手に応じた姿の顕現 (2)

「シャーリプトラよ、菩薩・摩訶薩たちは、迷妄なる (rnam par rmongs pa) 幼稚な者・異生に対して、正法を当知させるために、〔凡夫の〕信解とおりに種々の了知によって解脱を示しても、菩薩の法性から動じない<sup>(59)</sup>。次第に菩提座 (byang chub kyi snying po)<sup>(60)</sup>を得させるために、衆生たちに対して、種々の幻化の莊嚴の相 (sgyu ma'i bkod pa rnam pa) を示す。」と。

## 20. 在家菩薩と出家菩薩と無生法忍菩薩との施捨

「シャーリプトラよ、さらにまた、菩薩・摩訶薩〔のうち〕家に住する在家者 (khyim pa khyim na gnas pa)<sup>(61)</sup>は、二つの布施に住すべきである。「二つ」は何かといえば、すなわち、法施と財施である。シャーリプトラよ、菩薩・摩訶薩〔のうち〕家に住する在家者は、執着 (rjes su chags pa) が無く、瞋恚 (khong khro) が無

いことによって、その二つの布施に住すきである。

シャーリプトラよ、(P.Zi.116a) 菩薩・摩訶薩〔のうち〕出家に属する者 (rab tu byung bar gtogs pa)<sup>(62)</sup>は、四つの布施に住すべきである。「四つ」は何かといえば、すなわち、筆 (smyig gu) の布施と、墨 (snag tsha) の布施と、写本 (glegs bam) の布施と、法 (chos) の布施によって、である。シャーリプトラよ、菩薩・摩訶薩〔のうち〕出家に属する者は、それら四つの布施に住すべきである。

シャーリプトラよ、菩薩・摩訶薩〔のうち〕無生 (D.Ca.119b) 法忍 (mi skye ba'i chos la bzod pa) を得た者は、三つの捨施に住すべきである。「三つ」は何かといえば、すなわち、捨 (gtong ba) と、大捨 (gton ba chen po) と、極捨 (shin tu gtong ba) においてである。そのうち「捨」は、王位を捨すことである。「大捨」は妻と息子と娘とを完全に捨すことである。「極捨」は顔と手と足と目と皮膚と骨と骨髓を完全に捨すことである。シャーリプトラよ、菩薩・摩訶薩〔のうち〕無生法忍を得た者は、それら三つの完全な捨に住すべきである。」と。

## 21. 菩薩・摩訶薩たちの三毒(貪瞋痴)の過失

シャーリプトラは申し上げる－

「世尊よ、菩薩・摩訶薩たちは愛欲 ('dod chags) によって怖れないのでしょうか。瞋 (zhe sdang) と痴 (gti mug) とによって恐れないのでしょうか<sup>(63)</sup>。」と。

世尊が仰せになった。

「シャーリプトラよ、菩薩・摩訶薩たちの大の罪をともなった過失 (Tib.kha na ma tho ba chen po dang bcas pa'i nyes pa, Skt.mahāsāvadyāpatti<sup>(64)</sup>) は二つ〔である〕。「二つ」は何かといえば、すなわち、瞋が具わることと、痴が具わることである。シャーリプトラよ、そのうち二つが菩薩・摩訶薩たちの大の罪をともなった過失である。シャーリプトラよ、その「愛欲」は罪をともなうのは小であり (kha na ma tho ba dang bcas pa chung)、離れるのが遅いものである (D.bul ba yin no, P.phul ba yin no)<sup>(65)</sup>。「瞋」は罪を (P.Zi.116b) ともなうのが大きくて (kha na ma tho ba dang bcas pa che)、離れるのが速い (myur ba yin no)。「痴」は罪をともなうのが大きくて、離れるのが遅いものである。それはなぜかといえば、シャーリプトラよ、「愛欲」は輪廻の蔓草 ('khor ba'i khri

shing) を支える<sup>(66)</sup> (Tib.kun tu 'dzin pa, Skt.\*āgraha) から、結生の種子 (Tib.nying<sup>(67)</sup> mtshams sbyor ba'i sa bon, Skt.\*pratisaṃdhibīja) である<sup>(68)</sup>。そして「瞋」は速く断つから、悪趣に趣く因となったものである。「痴」は度(解脱)し難いから、八大有情地獄に墮ちる因となったものであるから。」と。

## 22. 十衆と、五衆と、一人或いは二人と、三十五仏とに対する過失の告白(布薩懺悔が前提)

「シャーリプトラよ、そのうち、菩薩による第一の重い「過失」(nyes pa dang po lci ba) は、十衆 (tshogs bcu) に対して正直に (drang por) 告白(懺悔)すべきである。

女の手を繋ぐ手の (D.Ca.120a) 重い「過失」<sup>(69)</sup> は、五衆 (tshogs lnga) に対して告白すべきである。

煩惱を具えた心をもって、目によって見た「過失」は、一人、あるいは二人の面前において告白すべきである。

菩薩による五無間を具えた「過失」と、女性 [について] の「過失」と、男児 [について] の「過失」と、手 [について] の「過失」と、仏塔 [について] の「過失」<sup>(70)</sup> と、僧伽 [について] の「過失」と、それら以外の諸々の重い「過失」は、三十五 [人] の仏世尊の眼前において、ただ一人で昼夜に告白すべきである。」<sup>(71)</sup>

## 23. 三十五仏に対する敬礼(三十五仏悔過)

「そのうち「告白(懺悔)」はこうである。[すなわち]「私、名をこう付けられる者は仏に帰依します。法に帰依します。僧伽に敬礼します。」[と]。

- 1) 如来・応供(阿羅漢)・正等覚者 [である] 釈迦牟尼 (Shā kya thub pa)<sup>(72)</sup> に敬礼します<sup>(73)</sup>。
- 2) 金剛摧伏 (rDo rje snying pos rab tu 'joms pa)<sup>(74)</sup> に敬礼します。
- 3) 宝光 (Rin chen 'od 'phro)<sup>(75)</sup> に敬礼します。
- 4) 龍尊王 (Klu dbang gi rgyal po)<sup>(76)</sup> に敬礼します。
- 5) 精進軍 (dPa' bo'i sde)<sup>(77)</sup> に敬礼します。
- 6) 精進喜 (dPal dgyes)<sup>(78)</sup> に敬礼します。

- 7) 宝火 (Rin chen me)<sup>(79)</sup>に敬礼します。
- 8) 宝月光 (Rin chen zla 'od)<sup>(80)</sup>に敬礼します。
- 9) 現無愚 (mThon ba don yod)<sup>(81)</sup> (P.Zi.117a) に敬礼します。
- 10) 宝月 (Rin chen zla ba)<sup>(82)</sup>に敬礼します。
- 11) 無垢 (Dri ma med pa)<sup>(83)</sup>に敬礼します。
- 12) 勇施 (dPa' sbyin)<sup>(84)</sup>に敬礼します<sup>(85)</sup>。
- 13) 清浄 (Tshangs pa)<sup>(86)</sup>に敬礼します。
- 14) 清浄施 (Tshangs pas byin)<sup>(87)</sup>に敬礼します。
- 15) 婆留那 (Chu lha)<sup>(88)</sup>に敬礼します。
- 16) 水天 (Chu lha'i lha)<sup>(89)</sup>に敬礼します。
- 17) 堅徳 (dPal bzang)<sup>(90)</sup>に敬礼します。
- 18) 栴檀徳 (Tsan dan dpal)<sup>(91)</sup>に敬礼します。
- 19) 無量栴光 (gZi brjid mtha' yas)<sup>(92)</sup>に敬礼します。
- 20) 光徳 ('Od dpal)<sup>(93)</sup>に敬礼します。
- 21) 無憂徳 (Mya ngan med pa'i dpal)<sup>(94)</sup>に敬礼します。
- 22) 那羅延 (Sred med kyi bu)<sup>(95)</sup>に敬礼します。
- 23) 徳華 (Me tog dpal)<sup>(96)</sup>に敬礼します。
- 24) 如来〔である〕梵光遊戯神通 (Tshangs pa'i 'od zer rnam par rol pa mngon par mkyen pa)<sup>(97)</sup>に敬礼します。
- 25) 如来〔である〕蓮華光遊戯 (D.Ca.120b) 神通 (Pad ma'i 'od zer rnam par rol pa mngon par mkhyen pa)<sup>(98)</sup>に敬礼します。
- 26) 財徳 (Nor dpal)<sup>(99)</sup>に敬礼します。
- 27) 念徳 (Dran pa'i dpal)<sup>(100)</sup>に敬礼します。
- 28) 名徳普称 (mTshan dpal shin tu yongs bsgrags)<sup>(101)</sup>に敬礼します。
- 29) 帝釈旗幢王 (dBang po tog gi rgyal mtshan gyi rgyal po)<sup>(102)</sup>に敬礼します。
- 30) 降伏徳 (Shin tu rnam par gnon pa'i dpal)<sup>(103)</sup>に敬礼します。
- 31) 闘戦勝 (gYul las shin tu rnam par rgyal ba)<sup>(104)</sup>に敬礼します。
- 32) 降伏行 (rNam par gnon pas gshegs pa)<sup>(105)</sup>に敬礼します。

- 33) 普莊嚴功德 (Kun nas snang ba bkod pa'i dpal)<sup>(106)</sup>に敬礼します。
- 34) 宝蓮華降伏 (Rin chen pad mas rnam par gnon pa)<sup>(107)</sup>に敬礼します。
- 35) 如来・応供 (阿羅漢)・正等覺者〔である〕宝蓮〔である〕華善住婆羅樹王 (Rin po che'i pad ma la rab tu bzhugs pa ri dbang gi rygal po)<sup>(108)</sup>に敬礼します。

## 24. 仏・世尊による護念の祈願

彼ら〔三十五仏〕など、十方世界すべてに、あらん限りの如来・応供 (阿羅漢)・正等覺者たち住しておられ、生きて過ごしておられる、それらすべての仏・世尊よ、私を護念してください。

### 【注】

- (1) Cf. 『浄土宗大辞典』2 (山喜房仏書林、p.116、1976)

【死生観】「死と生とをその全体において把握しようとする人間の心的な態度やあり方をいう。生と死はすべての生類に見られる一般的な現象であるが、その生死をみずから自身の問題として自覚できるのは人間存在だけである。すなわち人間とはとりもなおさず生死のうちにある存在として自覚する (中略)生と死の問題は、本格的には東洋において、とりわけインドにおいて、また仏教において、はるかに深い次元に立って追求された。生老病死は釈尊の求道の現実的な動機をなし、出発点となるものであった (中略)」

- (2) 1990年前後にかけて公表された、藤田光寛氏による〈菩薩地戒品〉の研究成果によって、〈優波離所問經〉を含む「大乘戒經」という經典群が〈菩薩地戒品〉の中に取り込まれ、後に大乘菩薩戒の「マートゥリカー (母胎)」への影響を及ぼす点が指摘された (Cf. 藤田[1989], [1990], [1991])。個々の大乘戒經の研究については、大野法道『大乘戒經の研究』(山喜房仏書林、1963)を参照のこと。当經については *ibid.*, p.401などを参照のこと。
- (3) 代表的な諸本を整理すると以下のとおりである。
  - ・サンスクリット語原典: *Vinaya-Vimścāya-Upāli-Paripṛcchā*, edtd., Pierre PYTHON, Paris, 1973
  - ・チベット語訳: '*Phags pa 'dul ba rnam par gtan la dbab pa Nye bar 'khor gyis zhus pa zhes bya ba thegpa chen po'i mdo* (デルゲ版: 東北 No.68、北京版: 大谷 No.760-24)
  - ・漢訳: 唐菩提流志訳『大宝積經』「優波離會第二十四」(『大正藏』11, 宝積部,

No.310-24)、西晋焜煌三蔵(竺法護)訳『仏説決定毘尼經』(『大正蔵』12, 宝積部, No.325)、唐不空訳『三十五仏名礼懺文』(『大正蔵』12, 宝積部, No.326)

解題については藤仲、中御門〔2011〕p155-164を参照のこと。

- (4) Cf. 荒井、袴谷〔1993〕p.76、鎌田〔2006〕pp.37-38
- (5) チベット仏教では通常、「仏菩薩」への敬礼偈は經典の場合が多く、「一切知者」へのそれは律が多い。当経は前者の敬礼偈である。
- (6) Python〔1973〕注記における漢訳の扱いは「漢文仏訳」となっているため、参照の難解さもある。
- (7) 〈優婆離所問經〉に関する、主要論書(〈集学論〉、〈入行論パンジカー〉、〈中論月称釈〉)の引用先については、Python〔1973〕p.1に詳細に整理されている。以下のとおりである。

a. *Śikṣāsamuccaya*, de Śāntideva, éd. C. Bendall (Bibl. Buddhica, 1), St. Pétersbourg, 1902 ; réimpr. s Gravenhage, 1957 (Indo-Iranian Reprints, 1); autre réimpr., Osnabrück, 1970. P.164,9-165,1 ; 168,15-171,6 ; cf.290,2-6. - Trad. Bendall-Rouse, A Compendium of Buddhist Doctrine, London, 1922.

La citation est importante car elle concerne la confession et la comparaison des deux Observances.

b. *Bodhicaryāvatāraṇjikā*, de Prajñākaramati, éd. Louis de La Vallée Poussin, Bibl. Indica, Calcutta, 1901-1914, p.153,14-154,13. La citation n'ajoute rien à celle du *Śikṣāsamuccaya*.

c. *Prasannapadā Madhyamakavṛtti*, de Candrakīrti, éd. Louis de La Vallée Poussin, Bibl. Buddhica IV, St-Pétersbourg, 1913 ; réimpr. Osnabrück 1970. P.53,7-54,4 ; 121,4-122,2 ; 155,1-12 ; 191,2-9 ; 234,10 ; 256,12-258,5 ; 348,14-349,2 ; 408,10-409,6 ; 429,4-430,4 ; 474,7-10.

特に〈集学論〉第8章「懺悔品」、第16章「賢行儀軌品」における懺悔の教証としての位置付けが重要である。三品儀礼ないし七支供養との関係を含めた、この点の詳細については藤仲、中御門〔2011〕pp.158-161 (Cf.〈ウパーリ所問經〉所説の懺悔)を参照されたい。また〈中論釈〉に非常に多く引用が見られるので、その分析が今後必要だと思われる。

- (8) Cf. 白崎〔1988〕,〔1989〕,〔1990〕(2本)
- (9) Cf. 藤仲、中御門〔2011〕
- (10) チベット語表記は、「*Ārya binaya binī shcayupā lipari pri cchā*」である。
- (11) 焜煌三蔵訳：如龍王視觀察衆生、菩提流志訳：如龍象王顧視觀察 菩提流志訳は、原語が「Skt. nāga」であることを念頭にして、「龍象」と訳したと思われる。

世尊が聴聞の弟子一人一人と向き合う様子を、象が首をひねるだけでなく、体全体を方向転換して周囲を見渡す様子に譬えている。同例は初期仏典〈大般涅槃經〉や、〈華嚴經〉「入法界品」にも確認できる。Cf. 小早川、藤仲〔2010〕pp.374-376註26 八十

随好にもあるようである(第十二)。

(12) 焮煌三藏訳：於後惡世、菩提流志訳：於後末世 一応直訳したが、意味としては「未来の時期(tshe)〔の、ある〕未来の時(dus)に」とも理解できる。

(13) 「理趣」(Skt.naya)の意味かもしれない。

(14) 竺法護訳：堪忍、菩提流志訳：堪任

Python [1973] のコンコーダンス (p.212) は、「(Tib.) spro ba,2-14,17、(Skt.) utsahate(utsah-), utsāha」を出す(ただし、「Tib.spro」が出る個所に対応する梵語は回収されていない)。〈翻訳名義大集〉の関係個所を挙げれば、以下のとおりである。

Cf. *Mahāvīyūtpatti*, 1789(1) Utsūḍhiḥ (utsṛicitaḥ) [藏] Spro-ba [漢] 愛、喜 [和] 喜ぶこと (ut + √suh(喜ぶこと) + ti)

Cf. *Mahāvīyūtpatti*, 1790(2) Utsāhaḥ [藏] Brtsom-pa [漢] 勤 [和] ut + √suh(堪ゆ) + a

Cf. *Mahāvīyūtpatti*, 2100(18) Utsāhaḥ [藏] Spro-ba [漢] 放出、喜歡 [和] 歡ぶこと

「Tib.spro」は通常「喜ぶ」の意味である。ここでは、「志す、十分にできる、悦んで行う」などの意味か。

(15) P.gzho nur gyur pa, D.gzhon nur gyur pa

(16) 対応するサンスクリット語は ketu。意味は「頂」、「頭頂の飾り」。

(17) 竺法護訳：無明、菩提流志訳：無明闇蔽

(18) Cf. ZK.p.1808 【bag tsha med pa】(2) (mngon) dpa' bo / 不怯。英雄別名。

(19) Cf. 田中 [2012]

望月信亨編『仏教大辞典』【十六正土】(pp.2411c-2412c)には、『思益梵天所問經』、『法華經』梵文序品、『大品般若經』第一序品、『光讚般若經』「第一光讚品」、『放光般若經』「第一放光品」、『般舟三昧經』「問事品」などの用例が紹介されている。すべてが統一した記述ではなく出入りがある。『法華經』梵文序品の用例を挙げれば以下のとおりである。

1. 賢護 (Skt. Bhadrāpāla)、2. 宝積 (Skt. Ratnākara)、3. 導師 (Skt. Susārthavāha)、
4. 仁授 (Skt. Naradatta)、5. 星授 (Skt. Guhyagupta)、6. 水天 (Skt. Varuṇadatta)、
7. 帝天 (Skt. Indradatta)、8. 上慧 (Skt. Uttaramati)、9. 勝慧 (Skt. Viśeśamati)、
10. 増長慧 (Skt. Vardhamānamati)、11. 不虛見 (Skt. Amoghadarśin)、
12. 善進 (Skt. Susamprasthita)、13. 善勇猛 (Skt. Suvikrāntavikrāmin)、
14. 無比慧 (Skt. Anupamamati)、15. 日藏 (Skt. Sūryagarbha)、
16. 持地 (Skt. Dhāraṇīdhara) である。

(20) P.D.ming 'bras bu mchis par sgrogs pas 漢訳に対応は無い。名は、五蘊のうち、色以外の受から識までの四蘊と考えることもできるし、空性思想における因施設と考えることもできる。極端な物質主義や實在論に立たなくても、因果の設定があるということになる。

(21) P.khams bas ma 'tshal pa rnam, D.khams bas par ma 'tshal ba rnam

竺法護訳：令無尽衆生皆得成就、菩提流志訳：不明

- (22) 竺法護訳：常行給事(施)、菩提流志訳：不明
- (23) チベット語訳では「P.D.sems can rnam kyi(衆生たちの)」である。竺法護訳は「与諸衆生安楽根本」、菩提流志訳は「与諸衆生自性安楽」である。
- (24) 竺法護訳：為作帰依、菩提流志訳：拔濟衆生
- (25) 「済度」、「度す」とも訳す。輪廻の暴流を渡るといった含意。
- (26) 『往生要集』『大文第二欣求浄土』では、大勢至菩薩の功徳を挙げる際にこの文を引用する(Cf. 石田瑞麿『往生要集(上)』岩波文庫、p.119、1992)
- (27) 竺法護訳：善数、菩提流志訳：善数
- (28) 竺法護訳：不調伏者、菩提流志訳：難調衆生  
Tib.ma dul ba の「dul ba」は形容詞であり、「調柔、穏和、温順」の意味である。「btul」すなわち動詞「dul ba(調伏する)」の過去分詞と同義である。ここでは漢訳を参照にして、「調伏」と訳した。
- (29) 轍の意味。
- (30) D.P.bzangs 漢訳からは Tib.bzang が推測できる。竺法護訳：妙意(音)、菩提流志訳：妙意
- (31) D.P.sems can dman pa la mos pa rnam 竺法護訳：喜樂小法諸衆生等、菩提流志訳：樂小法者  
漢訳は信解の対象から訳している。
- (32) P.D.N. は yi dags である(Cf.Python [1973] p.25)。yi dwags と理解した。「草食動物」においても「ri dwags」と「ri dags」の表記がある。
- (33) P.gnyi,D.nyi テルゲ版の読みを採用した。
- (34) 竺法護訳：我能堪忍常以讚歎饒益衆生。
- (35) 前世からの業果を思い起こさせること。
- (36) 「四輪」の項目が列挙されている。中村元『佛教語大辞典』【四輪】(東京書籍、p.534、1983)は、初期仏典を原拠とする二つの用例、すなわち①善郡居、依賢者、知諦願、宿命有福(『仏説七処三観経』)、②生中国、近善土、自正願、宿作福(『陰持入経』)を挙げる。何れも仏道修行の環境論に関する項目である。修行者にとっては、釈迦牟尼に出会えば、それが最高の修行環境になる。しかしそれが叶わない釈迦牟尼滅後の「今」においては、理想的な修行環境が切望される点を前提とした議論である。  
同じ問題について大乘仏教においては、行者から見た「選択の対象」となる修行環境、すなわち現世を離れた「仏国土」が求められたと考えられる。この議論を整理したものに〈大乘莊嚴経論〉cp.13,v.7がある。そこの主題はまさしく「修行環境論」であり、種々の快適な仏道環境を得るために、「Skt.prapadyante」(赴く、移動する)が説かれる。対応する漢訳は「往生」である。その説明と関係する具体的な例が、例えば〈行願讚〉v.51 や、〈文殊師利仏土厳浄経〉(Cf.P.Wi.304a,D.Ga.268a)にも見られる。〈無量寿経〉の法蔵菩薩の活動もこれに関係するといえよう(Cf. 中御門 [2013])。  
そもそも極楽浄土の具体的な起源を探る実証的研究は盛んであったが、その「枠組み」

を求める研究はそれに反してあまり耳にしない。しかし、上で確認したとおり、初期仏典には浄土教の基本的な術語は出ないが、その「祖型」は求められる。今後の検証が必要であるが、「四輪」の解釈の過程を経て、浄土教の骨格が整理されたともいえよう。なお「四輪」を説く代表的なものの出典は以下のとおりである。後秦仏陀耶舎共竺仏念訳『長阿含経』（『大正蔵』1, No. 1, p. 53bff.）後漢安世高訳『仏説七処三観経』（『大正蔵』2, No. 150, p. 877aff.）、後漢安世高訳『陰持入経』（『大正蔵』15, No. 603, p. 177ff.）、無着菩薩造、弥勒菩薩説、唐玄奘訳『瑜伽師地論』（『大正蔵』30, No. 1579, p. 874aff.）波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴経論』（『大正蔵』31, No. 1604, p. 621cff. ; 袴谷、荒井〔1993〕pp. 218-219、長尾〔2007〕pp. 219-221）、ツルティム、藤仲〔2014〕p. 193ff. 等がある。『翻訳名義大集』No. 1604(1)～No. 1607(4)が相当する。上記の四輪の議論を前提にすると、福光菩薩の提言は浄土への引導に関する内容となる。

- (37) 八大菩薩の一人に数える場合もある。
- (38) 〈八千頌般若経〉末尾には、「法上(Tib. Chos 'phags)菩薩」が登場する。
- (39) 竺法護訳：高麗版・行、三本、宮内庁版・眼 チベット訳は「mig」（眼）である。
- (40) 「何ものでもない」の意味。
- (41) 竺法護訳：法、菩提流志訳：法方所
- (42) P. 'gum par, D. 'gums par デルゲ版の読みを採用した。
- (43) 闇に相当する煩惱が光明によって寂まることは、例えば〈無量寿経〉四誓偈にも確認できる。〈無量寿経〉梵本：藤田〔2011〕pp. 26-27 = 梵文和訳：藤田〔1975〕p. 74 = 〈無量寿経〉諸本：香川〔1984〕pp. 154-155
- (44) P. sha ra dwa ti'i bus, D. shā ri'i bus
- (45) 竺法護訳：自莊嚴、菩提流志訳：勇猛弘誓  
被鎧精進については拙稿〔2008〕pp. 54-56 註 40 を参照。
- (46) P. 'dzin par 'gyur te, D. 'dzin par gyur te デルゲ版の読みを採用した。  
竺法護訳：爾時舍利弗聞諸菩薩作如是等。成就衆生以自莊嚴未曾有。前白仏言。未曾有也、菩提流志訳：爾時舍利弗聞諸菩薩作如是等勇猛弘誓、成就衆生。歎未曾有。白仏言。希有世尊。  
諸菩薩が「驚異だ、希有だ」という感想を持ったことを述べている。
- (47) P. ting, D. gting デルゲ版の読みを採用した。
- (48) ここでの主題である「精進」の対極である。
- (49) P. gang dag, D. yang bdag、竺法護訳、菩提流志訳：我常思惟  
両漢訳の読みより、デルゲ版の読みを採用した。北京版の読みは「誰か」の意味。
- (50) P. lus, D. yul デルゲ版の読みを採用した。
- (51) 竺法護訳：又舍利弗、是諸菩薩雖見諸仏神通變化、而於諸法心無所動、菩提流支訳：舍利弗、此諸菩薩摩訶薩、能現諸仏神通神變、滿足衆生諸所欲樂、而於諸法心不動転。  
両漢訳は「衆生の思い」が欲望に直結したものであり、それを菩薩・摩訶薩が満足さ

せたとしても、彼らはその妙欲の対境、あるいは自らの活動などの諸法に心が動かされることはない、という内容。平常心のあり方を示している。それに対し、チベット語訳に出る「菩薩の法性(chos nyid)」は〈般若經〉に類出する用例で、「菩薩のあり方」「菩薩の本来の姿」の意味であり、変化を示現する基体としての法身をも含意する(Cf.〈撰大乘論〉cp.10, sprul pa'i sku ni gang chos kyi sku la brten pa nyid de dga' ldan gyi gnas na bzhugs pa nas gzungs ste /~)。仏典には同義として「菩薩法爾」も出る。

- (52) 上で、思い(bsam pa)を完成させる云々についての詳説である。内容的には〈法華經〉「普門品」の普門示現のようなもの。
- (53) P. gi, D. gis 北京版の読みを採用した。
- (54) P. mos pa, D. myos pa、竺法護訳：無し、菩提流支訳：若有衆生樂為居士驕慢放逸  
デルゲ版の読みを採用した。掛け言葉としてもデルゲ版の読みが正しいようだ。
- (55) P. bsal ba, D. gsal ba
- (56) 「大力士の力」と「那羅延天の力」は、各々 *Mvy.*No.8210(3), No.8214(7)に相当する。ナーラーヤナはヴィシシュの別名であり、大力の持ち主とされる。この項目は、*Mvy.*8207以下の「〔漢〕転成十分名目、力以十分転成名(〔藏〕stobs bcur bsgyur te bsgre ba'i ming la)」に出る。
- (57) 菩薩乗と仏乗
- (58) Skt. tathāgata の gata には、1) 去る、行く、2) 了解する、の語義がある。ここでは後者の意味を出している。
- (59) 竺法護訳：不動法界、菩提流支訳：諸菩薩等於諸法界不生動轉
- (60) 菩提座には、1) 正覚そのもの、2) ブッダガヤの金剛宝座、の語義がある。ここでは前者の意味を出している。
- (61) 竺法護訳：在家菩薩、菩提流支訳：在家菩薩
- (62) 竺法護訳：出家菩薩、菩提流支訳：出家菩薩
- (63) 例えば、対応する菩提流志訳も「是諸菩薩於貪瞋痴不怖畏耶」というように疑問文である。
- (64) Skt. āpatti, Tib. nyes pa は「過失」「罪過」「罪」などの意味。本稿では「過失」と統一する。

「Skt. āpatti」については、中村元『佛教語大辞典』【罪惡】(東京書籍、p.451、1983)が詳しい。そこには、先ず伝統的な三毒(貪瞋痴)に対する、大乘仏教の解釈例が挙げられる。本来は重罪の「貪」であるが、大乘菩薩にとっては、有情に寄り添う意味での「貪」は悪でも危険でもない点(Cf.〈優波離所問經〉)、貪よりも瞋痴をより重罪とする点(Cf.〈優波離所問經〉、〈方便善巧經〉)が指摘されている(なお三毒のうち、瞋を違犯の根本とするものに、華嚴經「普賢菩薩行品」や、シャーントラクシタ著『菩薩律儀二十註』がある(Cf. 羽田野 [1988] p.160、ツルティム、藤仲 [2014] p.357 註7、中御門 [2014])。修行僧の罪である「Skt. āpatti」については、動詞形の ā-√pad(落ちる)から「過失によって落ちる」、すなわち「戒律を破る」という意味を指摘している。大乘仏教におけ

る例としては、ati-√i(乗り越えて過ぎる、征服する)に基づく「罪(Skt.atyaya)」を紹介している(Cf.〈金光明経〉)。この「罪(Skt.atyaya)」の滅については、人間の自力によって滅せられないものであり、諸仏への帰依によって摂受される性質である点が指摘されている(〈優波離所問経〉の場合は、Skt.atyayaではなくSkt.āpattiが説かれるが、そこの悔過儀礼は、〈金光明経〉のそれとよく一致する)。また頼富〔1990〕p.445によると、「āpattiとは、通常「宗教的な過ち、罪」などの意味で用いられ、波羅夷罪(pārajika)等のように、仏教者がしてはならないこ行為を指している」とある。「Skt.āpatti」は、大乘経典の本経や、伝安世高訳『舍利弗悔過経』(『大正蔵』24, No.1492)、伝聶道真訳『三曼陀跋陀羅菩薩経』(『大正蔵』14, No.483)のような、いわゆる悔過経典の主題であり、後の密教では「罪過(āpatti)律典群」として一ジャンルを占めるまでに至る(*ibid.*, pp.445ff.)。

- (65) 竺法護訳：因欲犯者、名為小犯、難得除却、菩提流支訳：因貪犯者、為過微細、難可捨離

直訳した「離れるのは遅い」とは、離れるには時間がかかるの意味。

- (66) あるいは「堅持」とも訳せる。  
 (67) Python〔1973〕(p.31)の「nyid mtshams」を「nying mtshams」と理解した。  
 (68) 原文「Tib.'dod chags ni 'khor ba'i khri shing kun tu 'dzin pa'i phyir」に出る「khri shing」について Lokesh Chandra, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*(p.274)を確認すると、1.khaṭvāṅga, 2.latikā, 3.vallīとある。1.khaṭvāṅgaは「支える足」、2.latikā, 3.vallīは「蔓草」等の植物の意味。対応する竺法護訳は「生死枝條亦為種子」、菩提流支訳「生死蔓莖連持不絶」である。両漢訳とも植物(蔓草)の理解、すなわち原語として2.latikā, 3.vallīを推測させるものである。愛欲が蔓草と結びつくことは、例えば初期仏典〈ダンマパダ〉v.340にも見られる。

「(中村訳) 340. (愛欲の) 流れは至るところに流れる。(欲情の) 蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知恵によってその根を断ち切れ。」Cf. 中村〔1991〕p.58

(Pāli.savanti sabbadā sotā, latā ubbhijja tiṭṭhati tañ ca disvā lataṃ jātaṃ mūlaṃ paññaya chindatha) Cf. *Dhammapada*, p.95, 1995, PTS.

一方で1.khaṭvāṅga(支える足)を想定した、「愛欲」は、輪廻の土台を支える(Tib.kun tu 'dzin pa, Skt.\*āgraha)ゆえに」という訳も可能ではあろう(同例は未見)。Cf. *Mvy.*No.6932(665) Khaṭvāṅgaḥ〔蔵〕 Khri-shing〔漢〕交床、

Cf. *Mvy.*No.433(83) Apagata-śākhā-pattra-palāśa-laṭikā-tvag-phalguḥ〔蔵〕

Yal-ga dang lo-ma dang 'dab-ma dang khri shing dang shun lpags-kyi skyon dang bral-ba〔漢〕離着枝葉藤華皮等衣〔和〕枝葉藤皮等の雜物を離れたる

- (69) 例えば『四分律』では、僧残「摩触女人戒」に相当する罪(Cf. 平川〔1993〕p.396ff.)。  
 (70) 例えば『四分律』では、百衆学の第六十から第八五までの二六条が「仏塔についての過失」に相当する。すなわち「仏塔中宿戒第六十」「藏物塔中戒第六十一」「著革屣入塔

中戒第六十二」「捉革屣入塔中戒第六十三」「著革屣繞塔行戒第六十四」「著富羅入塔中戒第六十五」「捉富羅入塔中戒第六十六」「塔下坐留食戒第六十七」「塔下擔死屍過戒第六十八」「塔下埋死屍戒第六十九」「塔下燒死屍戒第七十」「向塔燒死屍戒第七十一」「繞塔四辺燒死屍戒第七十二」「持死人衣牀塔下過戒第七十三」「塔下大小便戒第七十四」「向塔大小便戒第七十五」「繞塔四辺大小便戒第七十六」「持仏像至大小便戒第七十七」「塔下嚼楊枝戒第七十八」「向塔嚼楊枝戒七十九」「繞塔四辺嚼楊枝戒第八十」「塔下涕唾戒第八十一」「向塔涕唾戒第八十二」「繞塔四辺涕唾戒第八十三」「向塔舒脚戒第八十四」「安仏下房戒第八十五」である。

平川〔1995〕p.593は、この仏塔に関する二六条についてこのようにいう。

「四分律には「仏塔に関する行儀」を示す条文が二十六条ある。これは四分律のみに存在する特殊な条文である。四分律を伝持した法蔵部は、仏塔崇拜と密接な関係があったと見られるのであり、そのために仏塔の神聖さを傷つけないための規則が作られ、これが衆学法に挿入されたのであろうと思われる。四分律はこの仏塔の規則二十六条を加えて、衆学法百条となっている。(後略)」

(71) Cf. Python〔1973〕p.97

小乗律に説かれる布薩儀礼を前提として、儀礼に必要な比丘の人数や、過失の告白が説かれている (Cf. 平川〔2000〕pp.84-96、藤仲、中御門〔2011〕p.166註44)。小乗律との関係を明示するものとしては、菩提流支訳に律蔵の用語(波羅夷、僧残)が挙げられている。訳者の菩提流支は〈優婆離経〉を、従来の律蔵の上に、追加して菩薩戒を説いた經典と認識していたことは確かである (サンスクリット語原典や、チベット語訳には「波羅夷、僧残」の原語は無い)。具体的には、小乗律では中心とならない点(悪業の滅尽)を補うために、三十五仏への過失の告白(懺悔)が新たに追加されている。いわゆる「重楼戒」の構造である (Cf. 沖本〔2013〕pp.165-166)。「波羅夷、僧残」について確認すると、例えば『四分律』の戒本の比丘戒(二百五十戒)は、波羅夷(四)、僧残(十三)、不定(二)、尼薩者波逸提(=捨墮、三十)、波逸提(=単墮、九十)、提舍尼(四)、衆学(百)、滅諍(七)である。当経のチベット語訳(含サンスクリット語原典)と菩提流支訳との対応を整理すると、以下のとおりである。

Tib.Skt.「第一の重い過罪」 → 菩提流支訳「波羅夷」

Tib.Skt.「女性の手を繋ぐ手の重い過罪」 → 菩提流支訳「僧残」

チベット語訳、サンスクリット語原典に「第一(Tib.dang po,Skt.prathama)」とあるのは、比丘戒で「波羅夷」が第一にくる点を念頭にし、そして続く「女性の手を繋ぐ手の重い過罪」を菩提流支訳が「僧残」と訳すのは、例えば『四分律』の僧残「摩触女人戒」を念頭にしていると考えられる。

以下に漢訳二本とサンスクリット語原典の対応箇所を挙げる。

○サンスクリット語原典(Cf. Python〔1973〕pp.31-32)

「Tatra śāriputra prathamā (S169.1) āpattir daśavarge ṛjukena deśāyitavyā / hastāpattih pañcavarge gurvī deśāyitavyā / striyā hastagrahaṇaṃ cakṣurdarśanaṃ

/ duṣṭacitāpattir ekapudgalasya dvayor vā śāriputra tāṃ gurvīm deśayat /  
pañcānantaryasamanvāgatāpattirbodhisattvena striyāpattir dārakāpattirhastāpattiḥ  
stūpāpattiḥ saṃghāpattistathānyāścāpattayo bodhisattvena pañcatrīmṣātām  
buddhānām bhagavatāmantike rātriṃdivaṃ ekākinā gurvyo deśayitavyāḥ /」  
(S169,1 → 〈集学論〉梵本の引用箇所 Cf. Cecil Bendall [1977] p.169,1)

○竺法護訳『決定毘尼經』（『大正藏』12, No. 325, p. 38c）

「又舍利弗、若有菩薩犯於初戒。於十衆前、以正直心殷重懺悔。故犯戒者於五衆前、以正直心殷重懺悔。手捉女人眼見惡心。或一人或二人前、以正直心殷重懺悔。若有菩薩成就五無間罪。犯於女人、或犯男子、或故（手）犯、犯塔、犯僧。如是等余犯、菩薩应当三十五仏辺。所犯重罪、昼夜独処至心懺悔。」

○菩提流支訳『大宝積經』「優波離会」第二十四（『大正藏』11, No. 310-24, p. 515c）

復次舍利弗、若有菩薩犯波羅夷者、應對清淨十比丘前、以質直心殷重懺悔。犯僧殘者、對五淨僧、殷重懺悔。若為女人染心所触、及因相顧而生愛著、應對一二清淨僧前、殷重懺悔。舍利弗、若諸菩薩成就五無間罪、犯波羅夷、或犯僧殘戒、犯塔、犯僧、及犯余罪。菩薩应当於三十五仏前昼夜独処殷重懺悔。」

(72) 「釈迦族のムニ」の意味。以下同様に三十五仏名に関する、チベット語訳からの現代語訳を仮訳する。翻訳では特定の対応漢訳に出る仏名を出すのではなく、標準的な漢訳を出す。なお「三十五仏」の梵藏漢の対応については、白崎 [1988] pp.154-156 を参照のこと。そこでは、サンスクリット語原典、チベット語訳、『大乘集菩薩学論』、『三十五仏名礼讃文』、『決定毘尼經』、『大宝積經』「優波離会」、『観虚空藏菩薩經』、『菩薩善戒經』の対応が整理されている（諸本の書誌情報については本稿「はじめに」を参照）。

(73) 〈優波離所問經〉から、この「三十五仏懺悔」を部分抜粋したものが、〈菩薩墮罪懺悔經〉、あるいは〈菩提墮罪懺悔經〉と呼ばれる（Cf. 藤仲、中御門 *ibid.*, p.155 註1）。その註釈では、「如来釈迦牟尼に敬礼する (de bzhin gshegs pa Shā kya thub pa la phyag 'tshal lo)」と唱えることによって、万劫の罪惡が清淨になる。」（Cf. 藤仲、中御門 *ibid.*, p.168）というように、原拠に説かれぬ箇所（下線部分）が説明されている。儀軌書の性格が出た箇所である。

(74) 「金剛心(藏)による摧破」の意味。

(75) 「宝光を放つ」の意味。

(76) 「龍王の王者」の意味。

(77) 「勇者の軍」の意味。

(78) 「功德の歡喜」の意味。この場合の「功德」は「吉祥」と同義(以下同)。

(79) 「宝の火」の意味。

(80) 「宝月の光」の意味。

(81) 「見ると有益」の意味。

(82) 「宝の月」の意味。

(83) 「垢が無い」の意味。

- (84) Python 校訂には「dpal sbyin(勇施)」とあるが、北京版の読みを採用した。
- (85) 『決定比尼経』はこの前に「離垢仏」がある。
- (86) 「梵」の意味。
- (87) 「梵による施」の意味。
- (88) 「水の天」の意味。
- (89) 「水天の中の天」の意味。
- (90) 「功德の賢」の意味。
- (91) 「栴檀の功德」の意味。
- (92) 「無辺なる威光」の意味。
- (93) 「光の功德」の意味。
- (94) 「憂い無い功德」の意味。
- (95) 「無愛子(ナーラーヤナ神)、遍入天」の意味。
- (96) 「華の功德」の意味。
- (97) 「梵光〔によって〕遊戯する神通」の意味。梵本、漢訳二本対応なし。
- (98) 「蓮華の光明〔によって〕遊戯する神通」の意味。
- (99) 「財の功德」の意味。
- (100) 「念の功德」の意味。
- (101) 「名号の功德を良く広く称える」の意味。
- (102) 「インドラ神の旗である幢の王」の意味。
- (103) 「降伏の功德」の意味。
- (104) 「戦いから打ち勝つ者」の意味。
- (105) 「降伏によって行く者」の意味。
- (106) 「普く現れる莊嚴の功德」の意味。
- (107) 「宝の蓮華による降伏」の意味。
- (108) 「宝石〔でできた〕蓮華に居られるスメール山の王」の意味。

### 【参考文献】

- ・ 沖本克己『沖本克己仏教学論集〈第一巻・インド編〉』(山喜房仏書林、2013)
- ・ 香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』(永田文昌堂、1984)
- ・ 鎌田茂雄『八宗綱要』(講談社学術文庫、2006)
- ・ 小早川詔、藤仲孝司訳『明日が変わるとき』(UNIO、2010)
- ・ 白崎顕成「Jitāli の『菩提過犯懺悔註菩薩学次第 - (Bodhyāpattiḍeśanāvṛttibodhisattvaśikṣākrama) 研究 1, 2, 3 -」(『神戸女子大学紀要文学部篇』21-1, 1988, 22-1, 1989, 24L, 1990)、  
「Jitāli の Bodhicittotpādasamādānavidhi 研究 (1)」(『神戸女子大学紀要文学部篇』23, 1990)
- ・ 田中公明「大乘仏教在家起源説再考 - 『般舟三昧経』の八菩薩と十六正士を中心に -」

- (『印度学仏教学研究』61-1、2012)
- ・ ツルティム・ケサン、藤仲孝司『ツォンカバ菩提道次第大論の研究Ⅱ』(UNIO、2014)
  - ・ 長尾文庫、長尾重輝編『大乘莊嚴經論』和訳と註解 - 長尾雅人研究ノート(2) - (発行所 長尾文庫(代表 長尾史郎)、2007)
  - ・ 中御門敬教「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究(2) - 陳那、釈友、智軍の〈普賢行願讃〉理解 普賢行願区分の章(8章1節 - 8章10節) -」(『浄土宗学研究』34、2008)
  - ・ 中御門敬教「文殊の誓願行と浄土經典 - 〈文殊師利土土嚴淨經〉所説の「菩薩の学処」 「大波濤誓願」 「往生説」 -」(『印度学仏教学研究』62-1、2013)
  - ・ 中御門敬教「覚賢訳『六十華嚴』 「普賢菩薩行品」と同『文殊師利発願經』における普賢行 - 智軍著『普賢行願讃備忘録』が説く「普賢行願五義」を参照して -」(『印度学仏教学研究』63 - 1、2014)
  - ・ 中村元『ブツダの真理のことは 感興のことは』(岩波文庫、1991)
  - ・ 袴谷憲昭、荒井裕明『大乘莊嚴經論』(「新国訳大蔵經」瑜伽・唯識部12、大蔵出版、1993)
  - ・ 羽田野伯献『チベット・インド学集成』4(法蔵館、1988)
  - ・ 平川彰『二百五十戒の研究Ⅳ』(「平川彰著作集17」、春秋社、1995)
  - ・ 平川彰『原始仏教の研究Ⅱ』(「平川彰著作集12」、春秋社、2000)
  - ・ 藤田光寛「菩薩地戒品」和訳(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)』(『高野山大学論叢』24、25、26、1989、1990、1991)
  - ・ 藤田宏達『梵文和訳 無量寿經・阿弥陀經』(法蔵館、1975)、同『梵文無量寿經・梵文阿弥陀經』(法蔵館、2011)
  - ・ 藤仲孝司、中御門敬教「〈ウパーリ所問經〉に説かれた「三十五仏悔過」 - イェシェー・ギェルツェン著『菩薩墮罪懺悔註』の和訳と研究 -」(『ACTA TIBETICA ET BUDDHICA』4、2011)』
  - ・ 頼富本宏『密教仏の研究』(法蔵館、1990)
  - ・ Cecil Bendall, *Śikṣāsamuccaya*, 名著普及会, 1977
  - ・ Pierre PYTHON, *Vinaya-Viniścaya-Upāli-Pariprcchā*, Paris, 1973

## 【付記】

藤仲孝司氏に数々の御教示を頂戴した。

キーワード：死生観、大乘菩薩戒、戒律、ウパーリ、宝積經

(なかみかどけいきょう、知恩院浄土宗学研究所研究員、佛教大学非常勤講師)